

## グローバルイノベーション人材育成連携プログラム

(実施期間：平成 26～28 年度)

実施機関：慶應義塾大学（総括責任者：前野 隆司）

### 採択プログラムの概要

本プログラムは、SDM（システムデザイン・マネジメント研究科）、SFC（湘南藤沢キャンパス）、理工学部を中心として慶應義塾大学全学の連携のもと、産業界や地域の実課題に対し、領域横断的に国内外の機関と協創してグローバルかつローカルに事業を展開できる、国際的なエコシステムを創成できる組織力をもったグローバルイノベーション人材の育成を目的とする。SDMのシステム×デザイン思考の方法論とSFCのPBLに基づくイノベータ育成教育を基盤としており、集中して「多様性による協創」アプローチを学ぶコースワークと、実課題に対して創造的な解決策を出していくプロジェクトワークから構成されている。プロジェクトワークは、海外フィールドワークや、留学生を含むグループワークを実施するなど多様で国際的なプロジェクトから構成される。また、プロジェクトワークにおいて、必要に応じて、ネットワーク技術、デジタルファブリケーション技術、デジタルセンシング技術などの先端的な情報技術を駆使して課題を解決する。

#### (1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の 妥当性	補助事業期間 終了後における 取組の継続性 ・発展性
A	a	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

#### (2) 評価コメント

慶應義塾大学 SDM、SFC、理工学部を中心とした EDGE 教員チームによる 3 年間のプロジェクトマネジメントであり、慶應義塾大学にある多くの仕組みの上に EDGE 固有のプログラムを構築し、集中講義とプロジェクトワークからなるコース運営、及び、海外フィールドワークを採り入れた取組を実施している。産業界、地域などの実課題に対して領域に縛られることなく国内外の個人や機関と積極的に協創してグローバルかつローカルに事業を提案・展開できる、国際的なエコシステムを創成できるグローバルイノベーション人材を育成したと評価できる。

・**目標達成度**：他の大学や企業とのネットワークを駆使した集中講義とプロジェクトワークからなるコース運営を行っており、受講者数は目標を達成する延べ 221 名となった。受講者のうち外部機関、特に企業関係者の参加割合が極めて高い点は特筆できる。採択時の留意事項である幹事機関への協力については教材の公開を積極的に行い、他大学等への教育法の普及の点で大いに意

味がある活動となっており、総じて目標を達成したと評価できる。

・**成果**：人材育成プログラムは全て英語による集中講義とプロジェクトワークから構成され、イノベーション創出のための価値創出と多様性による協創アプローチを根幹とし、アイデアの創出から事業化までのプロセスを反復的に実践するカリキュラムを完成し実施している。プロトタイプリングの場としてEDGE ルームを創設している。企業や海外の大学等との連携による機能を活用したプログラムであり、海外の訪問先が多岐にわたっていることも評価できる。ただし補助金額に比して受講者数、コンテスト受賞数、起業数等は少ない。受講者のうち、修士・博士課程学生・37歳以下の若手研究者は4割で大学の研究成果を事業化する基盤ができていいるなど、総じて成果は評価できる。

・**計画・手法の妥当性**：EDGE 教員チームを編成し3年間に渡る一貫したプログラム全体の設計、実施、調整等を実施している。教育プログラムの主要な教材およびビデオのクリエイティブ・コモンズ・ライセンスでの一般公開による教授法のオープン化は他大学への普及、経験の共有という点で評価できる。受講者やプロジェクトチームの到達度等の評価指標の設定及びそれらの解析や、第三者による評価については示されていない。補助金の費用対効果の観点で今後はより多くの受講者を対象にする取組に期待する。

・**補助事業期間終了後における取組の継続性・発展性**：受講者のエコシステム、教育のエコシステム、運営のエコシステムが確立できたことで自立的な継続性が見込めると評価できる。採択時の留意事項にも指摘があるSDM とSFC の統合的取組や、ビジネススクールや医学系などの学内他部局との連携には今後発展の余地があり、全学的な組織力を生かした展開が期待される。寄付金や外部資金等の収入も見込めることから、補助事業期間終了後における取組の継続性・発展性が期待できる。